
一歩ずつ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一歩ずつ

【Nコード】

N6626K

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

バイト先でいわれのない疑いを受けた雪。そのことに絶望し何も希望を見出せなくなるがその時に。人生には色々なことがあります。

第一章

一歩ずつ

疑われたのは。いきなりだった。

「おい、藤本」

藤本雪はアルバイト先の店長にいきなり怖い顔で問われた。

「御前じゃないのか？」

「えっ!？」

「だから御前だろう」

いつもは穏やかな店長がこう彼女に問うてきたのである。その怖い顔でだ。

「御前が盗んだんだろう?店の金」

「店のお金って」

「昨日御前が最後だったよな」

「はい」

彼女はハンバーガーショップでアルバイトをしている。誰でも知っている有名なチェーン店である。今も店で開店準備にあたっている。

「じゃあ御前しかいないだろう?」

「あの、店のお金って」

「しらばっくれても駄目だ」

店長はまた彼女に言ってきた。

「御前が戸締りして最後に帰ったんだからな」

「それはそうですけれど」

「じゃあ御前しかいないんだよ」

店長はさらに怒った顔になっていた。

「御前以外にな。店の金を盗んだのはな」

「違います」

雪は俯いてこう言った。その白い顔はさらに白くなり眼鏡の奥の

長い睫毛を持っている二重の丸めの目も伏せられている。桃色の箸の唇も蒼くなっている。ショート髪も乱れた感じになってしまっている。

「私じゃありません」

「じゃあ証拠はあるのか？」

「それは」

「ないな。じゃあ御前だな」

雪は反論できなかった。まずバイトは首になった。そしてそれで済まなかった。バイト先の仲間達はそんな彼女を冷たい目で見送るだけだった。それどころか彼女の制服を彼女の目の前で破り所持品を全て店の外に投げ捨ててである。追い出しさえしたのである。

店長はそれで終わらせなかった。彼女を刑事告訴すると言いだしたのだ。

友人も誰も信じてはくれなかった。露骨に彼女を避けるようになり電話もメールもなくなった。家を訪ねてみても誰も出て来ない。近所でも露骨に陰口を言われ後ろ指を刺された。それまで親しく笑顔を見せてくれた人達が急に背を向け顔を顰めさせて背中を見て囁くだ。

家でもであった。何かというとその話になり彼女は家族からも言われるようになった。始終彼女に対して顔を曇らせて言ってきたのである。

「おい雪」

「本当のことなの？」

両親にこのことを問われるのだった。

「御前バイト先のお金盗んだのか？」

「そんなことしたの？」

「してない」

両親に対しても俯いて答える。

「私そんなことしてない」

「本当か？」

「そんなことしてないの？」

「してない」

こう答える。しかし両親は彼女を信じようとしなかった。それでこう言ってきたのであった。それはあからさまな言葉であった。

「若ししていたらな」

「早く出しなさい。そうしたら罪は軽くなるからね」

「そんな……」

両親の今の言葉は何よりもショックだった。親にさえ信じてもらえない、そのことが何よりも辛かった。雪はその言葉を聞いて完全に終わった。

それから部屋の中に閉じこもり出て来なくなった。携帯の電源も切り全てから逃げた。しかしそれでも告訴の話が来て親が扉の向こうからそのことをしきりに問うて来る。そしてある日のことだった。彼女は遂に早まってしまったのであった。

風呂に入っている時に手首を切った。湯舟の中に浸って全てを終わらせようとした。そのまま意識を失ったが風呂があまりにも長いので気になった母が見つけて救急車を呼ばれた。気付いた時には白い病室の中であった。そこで医者に言われたのである。

「危ないところでしたよ」

「何で生きてるんですか？」

雪はこう自分の枕元に立つその中年の女の医者に問うた。

「あのまま死ねば終わったのに」

「詳しい話は後で聞きます」

医者は今はそれ以上は聞こうとしなかった。

「しかし」

「しかし？」

「自殺をしても何にもなりません」

「こう彼女に言ってきたのである。」

「そんなことをしてもです」

「けれど私は」

雪は起き上がれなかった。体力以上に気力がなかった。その絶望しきった心の中で静かに医者に対して言ったのである。ベッドも病室も医者の服も何もかもが白い。だが今の彼女にはその白は明るいものには見えなかった。暗鬱なものにしか見えなかった。

第二章

「生きていても」

「自殺をするからにはそれなりの理由があるのでしょう」

「医者はそれはわかっているようであった。」

「ですが」

「ですが？」

「早まらないことです」

「このことをまた言ってきたのだった。」

「くれぐれも」

「生きていても仕方ないのに」

「ですからそれは間違いです」

「誰も信じてくれないのに」

「雪は本音を出した。出てしまったと言ってもいい。」

「それでもですか」

「誰も信じてくれないというわけでもありません」

「医者はそれを否定した。」

「それも間違いです」

「けれど私は」

「今は静かに眠って下さい」

「医者は優しい声をかけてきた。」

「それだけです」

「そうですね」

「時間はありますので。ゆっくりと休んで下さい」

「どちらにしろ今はそうするしかなかった。とても起き上がることはできなかつた。雪は暫く暗鬱な心であつたが静かに眠りに入った。どれだけ眠つたかわからないが起きてみると。そこにはまたあの女の医者がいて彼女にこう告げてきたのであつた。」

「お話は聞きました」

「私のことですか？」

「はい、告訴のことですが」

「まずはそのことを話してきたのである。」

「取り下げになりました」

「そうですね」

本来は嬉しい筈である。しかし今の彼女にはそれは喜べるものではなかった。

「お金が見つかったそうです」

「医者はまた言ってきた。」

「お店の隅に落ちていたそうです」

「それで告訴は取り下げになったんですね」

「店長がこのことで貴女に謝罪したいと言ってきています」

「謝罪ですか」

「そうしてまたお店に来てくれないかと言っていますが」

「いいです」

そのことははっきりと断った。完全にである。

「それは」

「いいのですか」

「もう行きません」

さらに断るのだった。

「それに」

「それに？」

「今は誰とも会いたくありません」

「こつも言ったのである。」

「誰かが来ても帰して下さい」

「それでいいんですか」

「御願います」

それでいいというのである。

「本当に誰とも会いたくありません」

「御両親やお友達が来てもですな」

「それでもです。会いたくありません」

その言葉は偽りではなかった。どうしてもであった。

「誰にも。ですから帰して下さい」

「わかりました。それでは」

「御願います」

こうして実際に面会に来た両親もかつて友人だった者達も近所の人達もバイト仲間でもある。誰もが帰された。彼女は完全にその心を閉ざしてしまった。

そのまま入院生活を送った。ずっとベッドの中に寝たまま起きようともしない。そうして医者のお話を聞くだけであった。

「もう起きれますよ」

「そうですね」

「それでもですか」

「いいです」

こう言うだけだった。顔を向けることもしない。ずっと天井を見上げたままである。

「このままでいいです」

「ですがそのままですとりハビリも」

「いいんです」

最早何もかもがどうでもよくなっていた。絶望は彼女の心を完全に捉えていた。

第三章

そうしてである。さらに言うのだ。

「もう」

「けれど食べることも殆どしないし」

「食べません」

実際に殆ど何も食べていなかった。食べられなくなっていた。拒食症に近い状態にもなっていたのである。

「お腹空いてませんから」

「そう言っても」

「いいんです」

何を言われてもこう言って拒むのだった。

「本当に」

「いいの？それで」

「どうせ」

そうしてであった。言うのであった。

「もう。私は」

「告訴されなくなったわ」

「医者はこのことを彼女に言う。」

「それでもなの？」

「それでも」

「また言う雪だった。」

「私は」

多くを言わなかった。もう言う気力もなかった。そうしてである。身動きせずただ白い天井を見ただけだった。そのまま退院まで過ごしてである。退院すると部屋の中に閉じこもった。もう誰とも会おうとはしなかった。

部屋を出るのは風呂とトイレの時だけだ。食事は扉の前に置かれるものを取ってそのうえで食べる日々だ。そうした日々を過ごすだ

けになっていた。

その雪に両親も声をかけなくなった。娘を疑った、いや決め付けたことで二人も負い目を感じていたのである。しかしそんな彼女にだ。

ある日のこと扉を叩く音がしてきた。そうして声がしてきた。

「いる？」

「いるって？」

「私よ」

明るい声が聞こえてきた。

「私だけれど」

「誰なの？」

ベッドの上に蹲ったままで問う。部屋の中は真っ暗闇である。雪は毎日その中に閉じ籠もるようになってしまっていた。そうして何をすることもなく蹲っているままなのである。

「一体」

「だから私よ」

声は女のものであった。

「私だけれど」

「私じゃわからないわ」

「レイラエよ」

日本人のものとは少しかけ離れた名前が出て来た。

「レイラニよ」

「レイラニって？」

「ほら、従姉の」

こう言ってきたのである。

「覚えてない？昔よく遊んだじゃない」

「レイラニっていったら」

扉の向こうの声を聞いてである。記憶を辿ってそのついで言っのであった。

「レイちゃん？」

「やっと思い出してくれたのね」

「確かハワイにいるんじゃない」

それは確かに彼女の従姉である。彼女の父親の弟の娘で母親がアメリカ人なのだ。それで名前がそうだったのである。なおその母親は父がハワイ系で母が中国系となっている。そうしたアメリカらしいがいささか複雑なルーツを持っているのが彼女なのである。

かつては日本にいてよく一緒に遊んだ。しかし今は父親が自分の妻の勧めでハワイに移住しそこに一緒に移ったのである。それでハワイにいる筈なのだ。

それでだ。改めて問うのであった。

「どうしてここに？」

「大学がね」

「大学が？」

「日本の大学に入ったのよ」

そうだとするのである。

「日本のね」

「そうなの。日本のね」

「それでも。何でここに」

「ここに住ませてもらうことになったのよ。下宿よ」

「そんなこと聞いてないわ」

これは当然と言えば当然だった。暫く入院して退院した今は引き籠もっているのだ。それで何かを知ることなぞできる筈もなかった。

「全く」

「それでね」

扉の向こうのレイラニは雪に構わず言ってきた。

第四章

「部屋だけれど」

「部屋は？」

「隣になったから」

「隣に」

「隣の部屋空いてるからってだからだというのである。」

「それでそこになったからね」

「そんなの聞いてないけれど」

「このことをまた言う雪だった。」

「レイちゃんがお隣って」

「宜しくね」

扉の向こうから明るい声が聞こえてきた。

「これからね」

「.....」

その問いには答えようとしないう雪だった。

沈黙した。だがレイラニはその彼女に更に話してきた。

「楽しくやろうね」

こう言っただけ今は扉の向こうから姿を消すのだった。しかしそうして彼女の気配を感じなくなると。雪は蹲ったままで一人呟くのであった。

「何であんなに明るいんだろう」

レイラニのその明るさを思い出して呟くのがあった。今の彼女にはそうとしか思えなかった。

その次の日だ。蹲ったまま眠っていたら。不意に扉をノックする音が聞こえてきた。

「何？」

「雪ちゃん、雪ちゃん」

明るい声がまた扉の向こうから聞こえてきた。

「起きてる？」

「何？一体」

「起きてるからね」

その明るい声での言葉である。

「いいかな」

「いいかなって」

「御飯食べよう」

こう彼女に言ってくるのである。

「御飯をね。一緒にね」

「一緒に？」

「そうよ。一緒にね」

つまり朝食を誘いに来たというわけである。

「食べよう」

「いい」

雪はレイラニのその呼びかけを断った。

「いいから」

「いいって」

「後で食べる」

こう言うだけだった。

「後で自分で食べるから」

「いいの？」

「放っておいて」

今度は完全に拒む言葉だった。

「私のことはもう」

「いいの？」

「いいから」

また拒む言葉を出すのだった。自然にである。

「私のことは」

「何でなの？」

「いいから」

この言葉が自然と出て来る。

「本当にいいから」

「じゃあ朝はいいのね」

「いいわ」

ベッドの上から動こうとはしない。全くである。

「だからね」

「わかったわ。それじゃあね」

「もういいから」

また言うのであった。しかしである。

その夜にだ。また扉をノックする音が聞こえてきた。そしてあの声もだ。

「雪ちゃん」

「レイちゃん？」

「そうよ、いい？」

また声をかけてきたのである。扉の向こうからだ。

「いいかな」

「何なの？今度は」

「晩御飯食べない？」

夜も彼女に声をかけてきたのだ。

「今から」

「いい」

またこう言うだけだった。なお昼もそうだったが朝は母が運んできた盆の上のそれを中に入れて食べた。それで済ませたのである。

第五章

「後で食べる」

「またなの？」

「いいから」

夜もこの言葉を出した。

「本当にいいから」

「それじゃあいいのね」

「うん、いい」

こう言うだけだった。

「だから」

「だったらいいけれどね」

彼女はそれでその場を退いた。雪はまた一人になった。

その次の日である。そのまま一人で夕食になって部屋を出て風呂に入る。するとである。

「ねえ」

「えっ？」

「ちよつと御免ね」

こう言うのである。風呂に誰かが入って来た。今雪は湯舟の中にいる。その彼女が見たものは。

「レイちゃん？」

「顔見るのは久し振りね」

紛れもなく彼女だった。長い髪を後ろで上に団子にしてまとめておりその表情は明るい。赤い綺麗な唇とやや切れ長の目をしている。スタイルは胸は普通だが腰が大きい。背は一六五で結構高い。その背もあつてかなりいいスタイルに見える。その彼女が全裸で風呂に入ってきたのである。

そうしてであった。笑顔で湯舟の中の雪に言ってきたのである。「いいかな」

「いいかなって？」

「私もお風呂に入って」

笑顔でこう尋ねてきたのである。

「それで」

「いいつてもう入ってるじゃない」

「じゃあいいのね」

「もう入ってるから」

湯舟の中で顔を俯けさせて言う彼女だった。

「仕方ないわ」

「じゃあそれでいいのね」

「いいわ」

こう返すしかない雪だった。

「一緒にね」

「有り難う。じゃあね」

こうしてレイラニも一緒に風呂に入ることになった。彼女はそのまままずはシャワーを浴びて身体を洗いはじめた。その身体を白い泡に包ませながらそのうえで雪に声をかけてきた。

「ねえ」

「何？」

「何か暗いね」

こう彼女に言ってきたのである。

「何かね」

「そうかな」

「気のせいかな。雪ちゃんとかうのは久し振りだけれど」

こう言ってから言葉である。

「それでもね。前はもうちょっと明るかった気がするけれど」

「そうかな」

「そうよ。あのね」

ここでさらに言うレイラニだった。

「明日だけれどね」

「明日？」

「私アルバイト休みなのよ」

こう雪に言ってきた。身体を洗いながらである。

「それでね」

「それで？」

「明日何処かに行かない？」

明るく笑いながらの言葉である。

「何処かにね」

「何処かに」

「そう、何処か外にね」

「いいわよ」

雪はレイラニのその誘いをすぐに断った。

「そんなの」

「そんなのって？」

「そんなのいいから」

そしてまた断りの言葉を告げた。

「本当に」

「いってどうしてなの？」

「何処にも行きたくない」

こう言ってしまった。

第六章

「本当に」

「けれどさ」

だがレイラニはその彼女に対してまた言う。

「外に出たらね」

「出たら？」

「楽しいわよ」

微笑んでの言葉であった。

「結構ね」

「楽しいって」

「だからとりあえず外に出よう」

また雪に対して告げたのだった。

「外にね」

「外に出て何かあるの？」

「だから楽しいわよ」

彼女が言うのは多分にこの一点であった。他には何も無いと言ってもいい位だ。それだけまず外に出て楽しむことを誘うのであった。

「いいわね、それで」

「私はまだ」

「やっぱり嫌なの」

「外に出たって何も無いわよ」

湯舟の中で俯いてまた言ったことだった。

「本当に。何もないから」

「またそう言わずにね」

「外に？」

「そう、外に」

意地であるかの様にレイラニも言うてくる。

「どうかしら」

「それで何処に行くの？」

「それは出てからね」

そのことについてはレイラニも答えなかった。られなかったと言つてもいい。

「決めるし」

「外に出てから」

「それでどうかしら」

「どうって」

「雪ちゃんの好きな場所でいいから」

「わかったわ」

そこまで言うのなら、だった。むしろ最近雪にそこまで言う人間はいなかった。話をするのも実際のところ久し振りのことであった。人と会うのもだ。レイラニのそのいきなりの行動に戸惑ってさえいた。その中でのやり取りであったのである。

そのレイラニに対して告げて。さらに言うのであった。

「明日よね」

「そうよ、明日」

レイラニは身体の泡を落としていた。丁度身体を洗い終えたのである。

そうして次は髪の毛をほどいていた。そこから洗おうとしている。

「明日ね」

「じゃあ明日ね」

「わかったわ」

こうしてレイラニの誘いに乗って外に出ることになった。次の日の朝である。いつもの様にベッドの上で蹲ったまま寝ていた彼女に扉の向こうから声がかかってきた。

「雪ちゃん」

「レイちゃん？」

「行こう」

明るい声で彼女に声をかけてきたのである。

「今からね」

「行くのね」

「もう着替えた？」

「御免、まだ」

こう彼女に返した。実際に今まで寝ていた。それで何かをできる筈もなかった。

「それはね」

「じゃあ用意して」

「うん」

実はまだ戸惑っている。しかしそれよりも先にであった。レイラニは言ってきたのである。

「待ってるから」

「待ってくれるの？」

「だって一緒に行くんですけどしょ？」

扉の向こうで笑っているのがわかる。声だけで。

「じゃあ当然じゃない」

「そう。だからなの」

「だから待ってるから」

また言ってきたレイラニだった。

「ここでね」

「有り難う」

この言葉を出したのも実際に久し振りであった。

第七章

「それじゃあ」

「二人でね」

「ええ、二人で」

雪はベッドから離れてそのうえで箆笥に向かって服を探した。そのうえで淡いピンクのシャツに白いコート、それに黒のロングスカートに着替えた。

その姿で扉を開けるとそこにはグレーのセーターに黒のジャケットト、同じ色のズボンのレイラニがいた。彼女はすぐに雪に対して言ってきた。

「似合ってるわね」

「そうかしら」

「ええ、似合ってるわ」

笑顔で雪に言ってきた。

「とてもね」

「そうなの。だったらいいけれど」

「自信持っていいわよ」

レイラニはさらに言つ。

「それはね。穂のうにね」

「そう。それじゃあ」

「それでね」

「それで？」

「あとは顔を洗って歯を磨いて」

「このことも話してきた。」

「メイクもして行きましょう」

「そうね。じゃあ」

「私はもうできたから」

見ればその通りだった。顔はさらに奇麗なものになっておりその

うえその身体からは薔薇の香りさえ漂ってくる。香水のものなのは明らかである。

「だからね」

「後は私だけなのね」

「そうよ。じゃあいいわね」

「うん。じゃあ」

それに頷いてであった。雪も自分の準備に入った。そしてそれが終わってからであった。

外に出る。横にはレイラニがいる。彼女がまた尋ねてきた。

「それでね」

「ええ、それで」

「何処に行くの？」

「このことを彼女に問うのであった。」

「それで何処になの？」

「それは」

それを聞かれて少し戸惑う雪だった。しかし少しだけ考えてからそのうえで述べるのだった。彼女が述べたその場所は何処かという
と。

「動物園ね」

「動物園？」

「そこに行かない？」

「こうレイラニに言うのだった。」

「これからね」

「動物園なの」

「ほら、子供の頃ね」

その時に遡った話であった。

「その時よく一緒に行っただじゃない」

「それで一緒にコアラとか見て」

「そこに行きましょう」

「こう提案するのであった。」

「二人でね」

「わかったわ。それじゃあね」

「ええ。それじゃあ」

「動物園に行きましょう」

レイラニは明るい笑顔で彼女の言葉に頷いて答えた。

「そこにね」

「ええ。あそこなら」

雪はふとしたように呟いた。

「レイちゃんも知ってるし」

「ええ、そうよね」

「それに」

「それに？」

「誰もいないから」

顔を俯けさせて目を斜め下にやっつての言葉だった。

「だからいいわね」

「誰もって？」

「何でもないわ」

今思っている言葉は言わなかった。言えなかったと言ってもいい。彼女にとってはそれは思い出したくもないことだった。現実というものがだ。

第八章

「それはね」

「そうなの」

「ええ。それじゃあね」

「行こう」

こうして二人は動物園に向かった。動物園には家族連れが多かった。皆明るい顔でピクニックを楽しむ顔で皆動物達を見ている。その中で、であった。

雪はレイラと共に動物達を見て回っていた。今はアシカ達を見ている。アシカ達は設けられた海と岩場のその場所で岩の上にあがったりその海の中を泳いだりして遊んでいる。雪は無表情のままアシカ達を見ている。ただ見ているだけで実に静かなものだった。

その彼女にだ。レイラニが微笑んで言ってきた。アシカ達の周りは日差しで照らされており海面もきらきらと光っている。その中で言ってきたのだ。

「そっいえばね」

「どうしたの？」

「雪ちゃんってアシカ好きだったよね」

このことを言ってきたのである。

「子供の頃いつも真っ先にここに来ていたわよね」

「そうよね。そっいえば」

彼女に言われてだった。そのことを思い出した雪だった。自分でも忘れてしまっていたのである。

「アシカって何か」

「何か？」

「可愛いから」

岩の上で鳴いているそのアシカを見ての言葉である。

「だから好きなのよ」

「それでなのね」

「そうなのよ。それにね」

「それに？」

「泳ぐのがとても速いし」

今度はその泳いでいるアシカ達を見て話してきた。アシカ達はまるで空を飛ぶ様に自由自在に海の中を舞っている。それを見ているのだった。

「だからそれもあったね」

「好きなのね」

「そうなのよ」

「そうなのよってことは」

レイラニは今の彼女の言葉を受けてまた言ってきた。

「今もなのね」

「そうね」

言われてみればだった。今度は気付いたのだった。

「それは」

「アシカっていいわよね」

彼女には顔を向けていない。しかし声だけで微笑んでいるのがわかった。

「可愛くて気さくな感じでね」

「そうよね。とてもね」

「ええ。ここで二人で見たの覚えてる？」

「覚えてるわよ」

レイラニは言いながら前に出て来た。そうして彼女の横に来たのだった。そのうえでまた彼女に対して声をかけてきたのであった。

「よくね」

「そう。覚えてくれてたの」

「いつも最初はまずここで」

アシカを見てということである。

「それにね」

「そうよね。それからね」

「他の動物達も見て回って」

いつもその流れだった。そのこともよく覚えていることだった。もっと正確に言えば思い出したのである。昔のことを思い出している言葉であった。

「そうしてたわね」

「子供の頃はいつもそうだったわね」

アシカ達を見ながらだった。不意に目が緩んできた。そうして。

第九章

その顔を見てだった。レイラニが笑顔で言ってきたのであった。

「笑ったわね」

「えっ？」

「久し振りに会ってからはじめてよね。笑ってきたの」

このことを彼女に言ってきたのである。

「そうでしょ？笑ったのはね」

「そうなの。笑ったの」

思えば笑ったこともなかった。完全に忘れてしまっていることだった。そしてそのことを自分でも思い出してだ。ふと言葉を出すのであった。

「そうだったのね」

「そうよ、今もよ」

「そうなの。笑ってるの」

「まずは笑いましょう」

レイラニの声が優しくかった。

「全てはそれからよ」

「そうなの。それからなの」

「笑ってそうして」

レイラニは言っていく。

「前に出ればいいから」

「そうね」

彼女もその言葉に頷くのだった。

「まずは笑ってね」

「ねえ、雪ちゃん」

今度はレイラニから言ってきた。

「何があってもね」

「何が？」

「そのことはいいから」

彼女は雪の過去に何かがあったことは察していた。しかしそこから何があったのかまでは知らなかった。もっと言えば知るつもりもなかったのである。

「けれどね」

「まずはなのね」

「そう、笑って」

まずはそこからだというのだ。

「笑って前に出ればいいから」

「それからなの」

「そう、それからよ」

こう言うだけだった。

「それからだから」

「笑ってそれから」

「行きましよう」

レイラニから誘ってきた言葉だった。

「それでね」

「そうね。じゃあ」

「いいものでしょ」

笑っている雪への言葉だった。

「笑うのって」

「そうね。それはね」

「いつも笑っていればいいから」

「また言ってきたのだった。」

「それだけでね」

「それで少しずつね」

雪もやっとなげた。そして前に出てである。レイラニと共に歩くのであった。今の彼女には日差しが強く照らしていた。その笑顔を照らしていた。

一歩ずつ

完

2010・1・25

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6626k/>

一步ずつ

2010年10月8日14時44分発行